

## 第二十六回大原富枝賞

### 総評〔一般の部〕

高知文学学校講師 若江 克己

~ 1 ~

文学をする、それは、心に生じた感動を、言葉に置き変えて読者に伝える作業である。そのためには、なにを、どのように、どういう言葉で綴ればいいのか、苦心しなければならぬ。しかし、その苦心こそが、文学をすることだと思っている。応募作のなかには、推敲不足と思われる作品もあったので、読み手を意識した苦心をこれからも続けていただきたい。

今回は、小説二十二編、随筆十七編の応募があり、最終選考に残った各十編を対象に、選考委員会を開いて議論した。選者によって推す作品が異なり、活発な意見が交わされた。

小説の部では、「彼女と私と小さな楽園と」（最優秀作）が面白く読めた。若い女性の心情が、重くもなく、さりとして軽薄にもならず、さらりとした文章で描かれている。「廃石」（優秀作）は、山間に住む少女の眼を通して、父親の不条理、鉦山の閉鎖、地域とのつながりを真摯に描いている。その他、「フラグメンタリイ」（優良作）は、恋心の欠片を胸に抱いている男の断ち切れない想いがうまく表現されていた。

随筆の部では、「野球狂少年」（優秀作）の描く昭和三十年代の暮らしが、眼にかぶるように描かれていて、作者がその頃をいとしく思う気持ちがよく伝わってきた。「お母ちゃん先生」（優良作）には巧まざるユーモアがあり、作者の切実な思いとは裏腹に心をなごませてくれた。

（審査員―杉本雅史、若江克己）

【一般の部・小説（最優秀）】

彼女と私と小さな楽園と

若い女性の友情を、都会暮らしのやるせなさをベースにして描いた作品。

靖代からの誕生日プレゼントは、大型の睡蓮鉢と『ビオトープ入門編』と書かれた中古雑誌だった。トモは、睡蓮鉢を使ってビオトープをつくることにした。ある日、靖代がメダカを捕りに行こう、とトモを誘う。道中、靖代から、仕事を辞めて実家にもどることを告げられる。会社から、お前は必要ない、と言われたらしかった。靖代は、私の代わりに小さな楽園をつくってよ、とトモに依頼する。

若々しい感性が、みずみずしい文章で描かれていて好感が持てた。筆致は軽やかだが、内容は濃密であり、そのバランスが巧みな小説だった。ただ、少し回りくどい表現の箇所が気になる、という指摘もあった。

総評〔高校生の部〕

高知工業高等専門学校講師 佐藤 元紀

二十六回目となる本年の大原富枝賞・高校生の部には四十七点（小説三十八点、随筆九点）の応募があった。しかし、随筆の応募点数は昨年比して極端に少なかった。随筆に接する機会が小説よりも少なく、ジャンルとしてイメージし難いためか、自身の体験を対象化して着想を得る随筆としての形式に困難を覚えるためか。いずれにしろ、随筆が書かれなくなることは問題である―特に大原富枝賞においては。

「書くことは生きるということ」を信念として、様々な女性を小説という舞台の上で演じてきた大原富枝であるが、故郷のことを書き留めた随筆にその真髄はある。そこには、もう二度と戻ることのできない在りし日の故郷の豊かな姿があり、童女の頃のおませな大原自身の姿がある。時間と共に「私」から失われて行くモノたちを留めようとしてことばを紡いだのである。本文学賞がそうした大原富枝の意志を継ぐものであることから、充実した随筆作品の応募を期待したい。

選考に当たって、「家族」の在り方に触れた作品が多かったことは特徴的だった。直接的なテーマではなくとも、「親」「祖父母」「兄弟／姉妹」などのことばに作品のどこかで出会った。ツールの発展とライフスタイルの多様化により、個人主義が進むところまで進んだ感のある現代において、旧来的な家族像の崩壊が多く作品で描かれている点には、身近な「家族」を対象化したという理由以外の何かしらの同時代的意義があるように思われて興味深かった。併せて、文章の粗さも特徴的だったと言わざるを得ない。誤字脱字、文章表現の不備、ことばの選択、タイトル等、推敲不足の印象がある。折角の文章も伝わらないのでは意味がない。難解な内容と、伝わらない文章とは別問題である。勢いに任せて筆を執ることも必要だが、冷静に読み返し、ことばの選択も含めて作品を練り直す作業が求められるのではなからうか。

【高校生の部・小説（最優秀）】

故郷

「故郷」とは、嫌悪と郷愁とが交差し、離れたくなる場所であり、いつかは帰りたい場所である。二年ぶりに故郷に帰った桜は、「自分が小さいころに見た風景はどこにもなかった」と変わってしまった故郷の姿を目にする。しかし、桜にとつて変わらない場所がひとつだけあった。それは十年前に幼なじみの勝太を失ったあの森の「秘密の場所」である。そこが桜を故郷から遠ざけ、またいつまでも桜を縛りつけていた。勝太の不幸な事故はあったが、桜は自分のせいだと悔やみ続けてしまう。しかし、「秘密の場所」に立ち、胸の内を打ち明けると、まるで勝太が応えてくれたかのように風が吹く。その風に許しを得た気がした桜は、過去の呪縛から解き放たれ、本来の私へと帰って行く。

見事なのは末部。桜の心中を象徴するかのように、手をつないだ少年と少女の「二つの影」が通り過ぎるといふ場面である。「過去の自分たち」が走り去ることによって止まっていた時間は動き出す。そうして一步前に進むことができた桜の様子はいつまでも心に残る。また、あの日から森の中に閉じこめられてしまった桜に向けられた「おかえり。帰ろう。」という祖母のことばも、あまりにも優しく特別に響く。読む者に、それぞれの過去の忘れ物を思い起こさせ、もう一度それとゆつくりと向き合うことの大切さを考えさせる秀作である。

総評 「中学生・小学生の部」

南国市教育委員 北村 初江

大原富枝賞の表彰式の頃の本山の清らかな空気の冷えや、大原富枝文学館を設立された皆様のことを思いながら、一次選考を経た小学生・中学生各十編を読ませていただきました。

小学生の部最優秀「弟と臨む沖繩学習旅行」は高知新聞社の学習旅行コンクール（作文の部）で入賞し、入賞した仲間たちと沖繩に行った時の感想を丁寧に書き上げています。普段生活している学校の友達とは違う新しい仲間と心を開き、良き友達になって、沖繩に着陸したことが弾むような表現に表れています。見るもの聞くもの体験するものすべてに好奇心旺盛に臨んでいることが伝わります。地球温暖化の問題・戦争と平和のこと・世界文化遺産のこと等、さまざまな角度から学習してきたことがわかります。二年生の時にたった一人で弟の誕生に立ち合い、助産師さんの仕事ぶりを見て感じたことを作品の題材にしたようです。その弟が旅行中に手術を終え、ジンベイザメのTシャツのお土産を喜んでくれたことが「心がほっこりして、ますます沖繩旅行が最高の思い出になりました。」の表現につながります。新しい友達とどんな世界を広げていくたくましさや家族に対する優しさを持ち、さらに、さまざまな体験から社会を見つめ考える力をつけて育っていることをとても嬉しく思います。

中学生の部最優秀「原風景」は、幼い頃から自然のなかでいろいろと遊びながら、さまざまな生物たちと関わり楽しんできた過程が躍動感溢れるタッチで書き込まれています。「たくさんの生き物を育み、数え切れない宝物をプレゼントしてくれたかけがえのない高知の自然は、僕らの原風景。決して色あせることなく、心のアルバムで耀き続けます。」と書いていますが、テナガエビ捕りの様子等胸が熱くなるほどの郷愁にかられます。自然溢れるこの高知県のよさを体験を通しての言葉で謳歌してくれました。明るく美しい文章です。世はまさに様々な問題を抱えながら、よりグローバル化・AIの時代へと突き進んでいます。だからこそ故郷の風景を胸に刻み込むことはより意義深いことなのではないだろうかと考えさせられました。

今回読ませていただいた作品は、小学生は家族との関わり合いを書いたものが多くありました。中学生の部では自らの生き方を考えている作品を多く目にいたしましたし、時代や社会の問題まで考えようとしているものもありました。表現は未熟であつても、時間のかかる作業であつても自分の思いを書き続ける営みを教育の世界からなくさないでほしいと心から思う次第です。「書くことは生きること」大原富枝の世界がそこにある気がいたします。

【中学生の部（最優秀）】

原風景

筆者の豊かな感性と描写力に魅了されながら、四万十川源流の自然に心奪われてしまいました。「自然の中で躍動する生き物の姿は、僕を魅了して止みません。たくさんの生き物を育み、数え切れない宝物をプレゼントしてくれたかけがえのない高知の自然は、僕の内風景。決して色あせることなく、心のアルバムで輝き続けます。」と書いています。「小さい頃から至る所で生き物探しを体験してきた」筆者ですが、テナガエビの件はまるで映画を見ているような鮮明さで伝わってきました。「その時は驚きのあまり無我夢中。（びっくり！）と（痛い！）と（嬉しい！）が三分の一ずつ、脳裏を駆け巡っていました。」強烈な体験をしてテナガエビ捕りが病みつきになったことを書いています。体験とともに残る心の風景素晴らしいですね。大原富枝の郷土は吉野川の源流。四万十川とともに豊かな生物・魚類を誇る美しい川ですね。

【小学生の部（最優秀）】

弟の臨む沖縄学習旅行

高知新聞学習旅行作文の部コンクールで入賞し、沖縄に行った時の感動を丁寧に書き上げています。小学二年生の時にたった一人で弟の誕生に立ち会った時に出会った助産師さんの姿から、助産師になりたい、何事にも責任感をもってやりたいと思ったことを作文にしました。今回の旅行中に弟は手術していたとのこと、その弟が沖縄土産を大変喜んでくれたというのを『ねえね、ありがとう。』とにこにこしながら言ってくれました。心がほっこりして、ますます沖縄旅行が最高の思い出になりました。」と書いています。二人の間の強い絆を感じます。また、周りの人たちの思いをしっかりと感じることもできる心の柔らかさも持っていますね。様々な体験をし、地球温暖化、戦争と平和の問題や世界文化遺産のことも等考えることもできましたね。好奇心旺盛な心が弾むような言葉を生んでいます。とても素敵な作品です。